
『生徒会役員共も妹も女子大生家庭教師（の生徒達）も思春期』

赤城晴信

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『生徒会役員共も妹も女子大生家庭教師（の生徒達）も思春期』

【Nコード】

N7505X

【作者名】

赤城晴信

【あらすじ】

『妹は思春期』 『女子大生家庭教師濱中アイ』 『生徒会役員共』を強引に一つにしたまったり日常下ネタショートストーリーです

舞台解説

『妹は思春期』 『女子大生家庭教師濱中アイ』 『生徒会役員共』
を強引に一つにしました。

二年生に

天草シノ

七条アリア

城島シンジ達

一年生に

津田タカトシと桜才の同級生達

小久保マサヒコと仲間達

思春期妹組

と配置しました。

かなり強引に一つにしたので色々粗があるかもしれませんがどうか
まったりとご覧ください。

恋愛絡みは基本的に同じ作品のキャラ同士でやります

小久保君 天野ミサキ、的山リンコ、若田部アヤナ

津田タカトシ 天草シノ、七条アリア、萩村スズ

城島シンジ 黒田マナカ、矢野アキ、城島カナミ？

基本は生徒会役員共のストーリーをメインに進む……かも

1話（前書き）

まったりゆったり過度の期待はしないでください

1話

『生徒会役員共も妹も女子大生家庭教師（の生徒達）も思春期』

私立、桜才学園。本来女子高だった学校が数年の休学を経て男女共学となったこの高校。

共学一年目の去年は男子生徒数驚愕の三人、今年はそれよりももう少しばかり増えたようだ。

「その男子生徒！」

溢れんばかりの女子生徒の仲、ダラダラと登校をする一人の男子生徒に声が掛かる。

どうやら声を掛けたのは生徒会役員のように、男子生徒は色々絡まれた後に強引に生徒会役員の一員にさせられてしまったようだ。

その様子を二人の学生が見ていた。

「相変わらず、強引だなうちの会長」

「可愛いからセーフだろ、うちの生徒会役員は皆可愛いよなあ。

パンツくれないかなあ」

「おはよ城島君、あと相変わらずキモいわねカズヤ」

「おはよう今岡、カズヤは放っておいてくれ」

城島シンジと新井カズヤ、昨年の数少ない男子生徒の二人であり、

今目の前で一年生の男子生徒を勧誘している生徒会長と同じ二年生である。

その彼に声を掛けたのが今岡ナツミ、彼らのクラスメイトだ。

「城島君、妹さんとは一緒じゃないの？」

「今日は珍しくカナミが寝坊してたから置いてきた。高校生にもなっって一緒に登校もどうかと思うしな」

今岡にキモイと言われたカズヤはハアハアと荒い息で恍惚の表情を浮かべている。二人はシカトして下駄箱にと向かった。

その横を小さな女生徒が走って通り過ぎて行く。

「小久保くーん！ おはよー！ あ、 ミサキちゃんも！」

「おはよー的山、 あんまり走りど転ぶぞ」

「おはようリンちゃん、 今日は迷わなかった？」

「うんばつちりー！ ……とは行かなくて途中でアヤナちゃんに助けて貰ったんだ」

「どうやら、 中学からの知り合いであるような集まり、 小久保マサヒコを中心とした集まりで、 一緒に登校して来た幼馴染の天野ミサキ、 一際背が小さく眼鏡っ子の山リンコ、 リンコの後から少し遅れて歩いて来た若田部アヤナ。 皆仲良く桜才学園にと進学して来ていた。」

「しかし、 本当に良かったのか若田部、 直前までアメリカ留学と桜才で迷ってたけど……」

「だから何度も問題無いと言ってるでしょ！ 別に小久保君の為に桜才に来たって訳じゃないんだからね！ 桜才は進学率だって良いし！ それにお父さんも無理にアメリカについて来なくて良いと言ってくれたし！」

「絵に描いたようなツンデレってやつだねー」

アヤナとマサヒコのやり取りをリンコがニコニコと笑って聞いている。

「わ、 私はツンデレってやつがよく分からないかな……あれ？ 天草先輩！？」

アヤナとリンコも輪に入り、 四人で同じく下駄箱に向かう、 途中でミサキが生徒会長を見つけて声を掛ける。

「ん……？ ああ！ ミサキか！？ 久しいなあ！？ おお小久保まで一緒か！」

「児童会長！？ 桜才だったんですか！？」

「ふふふ、 今は児童会長ではなく生徒会長だ！ おしいな、 もう少し早く来ていれば小久保やミサキの枠もあったのだが、 今生徒会はこの新一年生萩村スズに津田タカトシを加えて満席になってしまったのだ」

「……いや俺は辞退でも構わないんですが」

「私は一応昨日の入学式後から生徒会に入ってますけど」
萩村スズと呼ばれた少女を見て誰もが「小さ!」と言う言葉を飲み込んだ。

「いや、もう決まっちゃったしな。なあアリア」

「そうねえ、所でこの既にハーレムを作っている新入生の子はシノちゃんのお友達?」

生徒会長天草シノと書記の七条アリア。その二人に捕まっているのがマサヒコと同じ数少ない男子生徒津田タカトシだ。

「うむ、オナシヨーなんだ。別にオナシヨーと言ってもオナニシヨーの事では無く同じ小学校と言う意味だぞ!」

「誰も間違わねえよ!」

「(……中村匂がするな)」

シノの言葉に早速タカトシがツッコミを入れる。マサヒコは無表情で昨年まで自分の家で家庭教師をしていていた女性の先輩を思い浮かべていた。

「天野ミサキです。天草先輩は昔から年下の子が好きですもんね」

「な、何を言うかミサキ! それより、お前は小久保とどうなんだ!? まさかもう!?!」

親指を人差し指と中指の間に挟み込むいわゆるナニのポーズをミサキの前に出すシノ。

「相変わらず下品ですよ天草先輩! マサク……小久保君とは何もありません!」

「いいんだぞー? 昔みたいにマサクんマサクん言っても。あ、だが桜才学園は一応恋愛禁止だから上手くやるんだぞ!」

「……小久保マサヒコです」

「……津田タカトシです」

勝手に盛り上がっている女子陣の横で、何か感じる物がある野郎二人が挨拶を交わす。きっと自分達はこの学園で大変な目に合うだろうと直感的な何かが告げていた。

「お兄ちゃん！」

その時、盛り上がっていた一行を遮るように、大きな声で下駄箱にと走って行く少女達。

「早いよー！一緒にイクって行ったのにー！お兄ちゃんの早漏！早過ぎるよー！」

「そうですよ！お兄さんの早漏！でもカナミちゃん、お兄さんみたいにオナニーばかりしていると遅漏の可能性もありますよ？」

「（シカトしよう）」

大声で自分の早漏遅漏談義をする妹とその幼馴染がこちらに向かって来るのを見て、城島シンジは逃げるように教室に向かった。

2話(前書き)

まったりゆったりショートストーリー

2話

二話

「……生徒会かあ」

津田タカトシは教室で大きく溜息を付いた。家から近いと言う理由だけでこの桜才を選んだような人間なので生徒会活動などもって他なのだが強引に生徒会に入れられてしまった。

「（まあ、皆可愛いかつたのは事実だしな……）」

「えーじゃあまずは学級委員長と副委員長を決めて貰います」

担任の教師がそう教壇の上で告げる。タカトシがクラスを見渡すと数人だけが乗り気のように後は皆我関せずの態度を取っている。

「私が、立候補します」

スツと、凜とした声で一人の生徒が手を上げる。抜群のスタイルと整った顔立ち。若田部アヤナは自信満々の表情で席を立った。

「賛成賛成！ アヤナちゃんならきつと大丈夫だよー！」

「うん、そうだねリンちゃん」

リンコとミサキは賛成の色を見せ、クラスの大半も自分以外なら誰でもいいと言った感じであった。

「カナミちゃん見てくださいあの胸……」

「うん……どうやら私達の敵みたいだね」

「あんたらは巨乳だったら誰でも突つかかって行くのか」

城島カナミと黒田マナカ、彼女らと中学からの親友矢野アキはアヤナの胸をガン見している二人を注意する。

「アキちゃん巨乳仲間が出来たと思って調子に乗ってー！」

「しかし巨乳は馬鹿と言いますが若田部さんはとても聡明そうですね。ねえアキさん」

「どうせ私は馬鹿だよちくしょうー！」

「（このクラスから嫌な予感しかしねえ）」

大声で巨乳巨乳連呼する二人を見て小久保マサヒコは中学時代以上の下ネタ地獄を覚悟した。

「ちよつと！ 天野さん！ なんで対立候補にならないのよ！ 今回もまた勝負よ！」

「い、いいよ……中学三年の時は私がやったから今回は若田部長んがやりなよ」

「そうだ、言い忘れていたが折角共学になったんだから副委員長は男がやってくれよ」

担任の言葉に数人しか居ない男子生徒から批判の声が飛ぶ。

「だりいよ、先生俺部活あんすよ」

「俺もー」

「うむ……部活は仕方ないか。部活に所属する予定の無い者はいるか？ というか後は津田か小久保しか居ないが。どうなんだ？」

「津田は駄目ですよ、生徒会役員ですから」

「だそうです」

一部の人間を除いて皆が発言した萩村スズを見て必死に「ちっさ」と言う言葉を飲み込んだ。

「わー！ 可愛い！ ロリっ子が居るよmanaちゃん！」

「凄いですね。設定的には飛び級でしょうか？」

「誰がロリっ子だこらああああああああああ！ いい！？

私は

「……じゃあ自動的に俺かよ」

騒いでいる三人はおいておいて、少ない男子生徒数が災いして自動的に副委員長にと任命されてしまったマサヒコであった。それを聞いてミサキの顔色も変わる。

「ふふ、小久保君、仕方無いからこき使ってあげるわ」

「……程々にしてくれよ」

「私も立候補します！」

アヤナはマサヒコに向けて妖艶な笑みを浮かべていたが、それに割って入るようにミサキが立候補する。

「……現金ね天野さん」

「わ、私は若田部さんの挑発に乗っただけだから……でもどうやって勝負するの？」

「そんなのいつも通り学力勝負に決まっているじゃない！」

「おいおい、それは困るぞ。この時間の内に決めてくれ」

担任が慌てて言う。アヤナとミサキはそれを聞いて困ったような表情を浮かべる。

「話は聞きました。私達に任せてください」

「マナカちゃん！何か考えがあるの？」

「（絶対ややこしい事になるな）」

アキは声には出さなかったが、中学からの経験でそう感じ取っていた。

「お見受けした所、副委員長さんと委員長立候補者のお二人は同じ中学校でそれなりに仲が良かったようです。委員長と副委員長の連携がしっかりと取れていた方がクラス運営はより良くなるので、ここはどうでしょうか。副委員長の事をよく知っている方が委員長と言う事で」

「わーいい考え！おもしろ、いやとても公正な勝負だよ！」

「そんな曖昧な勝負じゃ駄目よ！第一誰が審判になるの？」

「それはやはりクラスの皆で審判します。委員長というのはクラスの代表ですから！」

「（もう滅茶苦茶じゃん）」

かなり強引な手法で『小久保マサヒコ王選手権』を開催しようとしているマナカを呆れるアキ、教師もそれで決まるのならと放置している。

「では早速！ 実況は私黒田マナカと」

「城島カナミでお送りします 解説は小久保マサヒコ君をよく知る的山リンコちゃんに来て貰いました」

「はいー！」

「何やってんだよ的山……」

知らない内にややこしい事に巻き込まれてしまったマサヒコは疲れ
たような表情でアヤナとミサキの間に座る。

「リンコちゃんと小久保君はどういう関係ですか？」

「はい、小久保君のオナペットです！」

「ちよつとそいつ黙らせてくれ！」

「大人しそうにして小久保君もやりますね……では早速勝負に参り
ましょう。勝負はよりディープに小久保君の事を知っている方の
勝利です」

「どんな勝負だよ！」

マサヒコが大声で突っ込みを入れるがスルーされて場が進む。そ
れを見てタカトシは涙を流しそうな勢이었다。

「何泣いてんのよ津田」

「不憫で……」

明日は我が身の気がしてならないタカトシであった。

「ディープつてのはよく分からないけど……甘い物が苦手だよね？」
口火を切ったのはミサキ、やはり幼馴染としての強さがあるよう
だ。

「その程度なら……ゲームが好きなのよね？」

アヤナも負けじとそれに続く。

「ラブラブ系は駄目ですがエロゲは好き……陵辱好きなんですよ
か？」

「意外とDSなのかな？」

「実況悪意の塊じゃねえか！」

「ミサキちゃんと小久保君は幼馴染なんだよー」

悪意しかない実況に苦言を呈すマサヒコ、リンコは律儀に解説を
続ける。

「んと……放っておくと部屋を汚くしちゃつよね？」

「……何故か私を押し倒して来るわ」

「マサちゃん？」

「それはもう和解したたる若田部！」

ついつい怒りで小さい時の呼び名で呼んでしまつミサキ。アヤナは何処か勝ち誇つた表情をしている。

「これは一気に攻めて来ましたねマナカちゃん」

「そうですね。『私、小久保君の部屋とか知ってるよ』アピールに『押し倒されるような関係なのよ』アピールで返す高度なテクニクです」

「これなんの罰ゲーム？」

マサヒコは頭を抱えて呟いた。

「て、手を繋いだりすると結構手が大きくて頼りがいある！」

「一緒に寝た時に結構胸板とかあつてドキつとしたわ！」

「マサチャああああああああああん!？」

「誤解を招く! ちゃんと前後の話をしないと誤解招くから! っ
て言うかもつ委員長関係無くなつてるから!」

ヒートアップして周りが見えていない二人をマサヒコは必死に止めようと試みたが、強大なプレッシャーを放つミサキを止める事は出来なかった。

「これは思った以上だねマナカちゃん……ここまで面白くなるとは
「乱れる若者の性ですね……」

結局、その後も恥ずかしい暴露が飛び交い。最後に『硬いもの(本)を胸の間に押し込まれた!』と言い放つたアヤナが勝利し今年度の委員長となったのだった。

こうして、マサヒコやアヤナやミサキが色んな物を失つたホームルームは終わって行くのだった。

3話(前書き)

ゆったりまったりショートストーリー

3話

3話

「あ、お兄ちゃんだ」

昼休み、早速仲良くなった女子達に強引に昼食に誘われ一緒に食事をするマサヒコ。

数少ない男子のクラスメイトは学食に行っているようで。タカトシに関してはスズに生徒会室へと連行されていた。

カナミは窓の向こうに見える売店に向かう通路に兄を発見した。

「城島、お兄ちゃんがいるのか？」

「うん、去年桜才に入るって聞いてびっくりしたよ。ハーレム作りたいが為に桜才受けるなんて」

「やはりハーレムは男のロマン、そういう物なんでしょうか小久保君？」

「シカトしていいからね？」

カナミの言葉を冷静に流すように促すアキ、中学からの仲とあつてもう彼女らの下ネタにも慣れていようだ。

「何を言うんですかアキさん。リアルでハーレム作っている人なんてそうは居ないんです。是非題材にさせてください小久保君」

「題材？」

「私、小説家志望なんです」

「へー凄いな」

カナミはカナミと違い大人しくどこかお淑やかな雰囲気があるので小説家志望と聞かされても納得してしまうマサヒコだった。

「取り敢えず4Pのプレイ内容を詳しく教えて下さい」

「俺の尊敬返してくれる？」

「カナミ、小説家志望は小説家志望でも官能小説だからね」

ものの数秒でマサヒコの尊敬心をぶち壊したカナミであった。 —

方のアヤナとミサキはぐったりと疲れたような表情を浮かべている。
リンコだけはパクパクと元気に食事を進めているが。

「どうしたの若田部さん、天野さん、元氣無いよ?」

「箸が進んでいないようですが?」

「……貴方達のせいでしょう!」

朝のホームルームでついつい火がついてしまい色々と恥ずかしい目にあってしまった二人、既にクラスではマサヒコハーレムの一員として数えられてしまっている。

「いいじゃないですか若田部さん、皆に知られてしまった方がやりやすいですよ?」

「だからそんなんじゃないって言っているでしょ! 朝は少し大袈裟に言ってしまっただけで……小久保君はただのクラスメイトよ!」

「私もただの幼馴染だよ!」

「私もただの穴奴隷だよ!」

「的山、中村からの入れ知恵は全部忘れる」

恐らく意味など理解していないリンコは笑顔でとんでもない事を言う。

「怪しいくなんか怪しいよねマナカちゃん」

「そういう貴方達はどつなの!? 人の事はかり言って!」

アヤナがなんとかこの流れを止めようと声を上げる。

「私達? 私はお兄ちゃんが居るし」

「私もお兄さんに処女を捧げると幼児の時から決めていましたし」

「どんな幼児だどんな」

「っていつか真昼間から処女とか言うなよ」

冴え渡るマサヒコとアキの突っ込み。突っ込み仲間が増えた事が少し嬉しいアキとマサヒコであった。

「私も兄が居るけど……肉親へは恋愛感情とは別でしょう?」

「え? 兄の童貞は妹が責任持って奪うじゃないの!?!」

「近親相姦は基本ですよね」

「……私には理解出来ない世界だわ」

「理解出来きたら逆にアレだろ」
呆然とするアヤナにマサヒコが苦笑いで答えて、マサヒコはミサキが密かに作ってくれた弁当を口に運んだ。

「えっ!? 津田君妹さんが居るの!? じゃあ毎晩お楽しみだね」
「……はい?」

「アリアは重たいジョークが好きなのだ」
昼休みの生徒会室、教室での下ネタ地獄から抜け出したかと思うと更なる下ネタ地獄が待っていた。

「萩村が来いって言うから来てみたら……昼飯食べるだけですか」
「何を言うか、こつやつて生徒会同士親睦を深めるのは大事だぞ」
「深い仲になるうって事だね!」

「言い回しが少し危ない!」
ギョツと胸をよせてそう言うアリアに内心魅了されながらもしつかり突っ込む

「どうも、新聞部の畑です」
その時、生徒会室の扉が開かれる。カメラを持ったおっとりとした女性が部屋にと入って来る。畑ランコ、シノやアリアと同じ二年生だ。

「どうした畑、何か用事か?」
「いえ、一身上の都合により抜けた生徒会役員の穴が新たな役員で埋まったと聞きました」

「流石耳が早いな、この二人が新たな役員だ」
シノがタカトシとスズを紹介する。

「……おいくつ?」
「十五歳じゃああああああ!」
「(この流れは鉄板か)」

首をかしげてスズに尋ねるランコ、タカトシは無表情で言葉無く突っ込む。

「すいませんジョークです。しっかり情報入ってますよ萩村スズ

さん、それで、こちらがハーレム狙いの津田君ね」

「初対面なのに失礼過ぎる！」

「どうです？　うちは美少女揃いなのでしょう。お気に入りの子は？」

「キャバクラかよ！」

「成程、いい逸材ですな会長」

「うむ、いい物を持っている」

ランコの言葉にシノが満足顔で答える。

「俺突っ込み要因かよ！」

「モノ！？　シノちゃんも見たの！？　被ってた！？」

「なんだよこの生徒会！」

「私はもう慣れた」

「じゃー取り敢えず集合写真とって帰りますネ」

驚愕の生徒会、これからの学校生活に不安しか生まれないタカトシであった。

ちなみに次の日発行された学校新聞の一面は『副生徒会長、ハーレム第一歩か』の見出しでタカトシを中心に撮られた写真だった。

4話(前書き)

ゆったりまったりショートストーリー

4話

「あー新学期一発目ようやく終わったー」

担任が教室から出て行ったのを確認し、カズヤはグダーと机に突っ伏した。

「だらしないわねカズヤ、いいじゃないのアンタは帰宅部でこの後もう自由でしょ？」

「ふっ、そう暇って訳でもないんだぜ。この脚本を練り直さなきゃないんだ」

「脚本？ 何それ？」

ナツミはカズヤから紙切れを受け取る、それを数秒見つめてからカズヤに鉄拳を食らわせる。

「イメクラ用じゃねえか！」

「気持ちいい！」

ナツミの拳をくらい尚気持ち良さそうなカズヤをクラスの大多数の女子達はドン引きして見ている。シノとアリアだけがその会話に入って行き。紙切れを取る。

「ふむ、痴漢をしたが返り討ちにあい逆レイプされるか……なかなかセンスがいいじゃないか新井！」

「うんうん、面白そうだね」

「……この人達生徒会役員よね？」

「……慣れるんだ今岡」

カズヤのイメクラ用脚本を絶賛するシノとアリアを見て愕然とするナツミ、シンジは無表情でそう告げた。

「じゃあじゃあ！ 天草か七条が相手役を！」

「あ、シノちゃんそろそろ行かないと」

「うむ、そうだな」

「……放置プレイ」

生徒会室にと行ってしまったシノとアリア、取り残されたカズヤ

はハアハアと荒い息を上げた。

「物凄い頭も良くていい人達なのにね……」

「まず高校生がイメクラ行ってる所を誰か突っ込めよ」

このクラスにもぶっ飛んだ人達が多数在籍しているようで数少ない常識人のナツミとシンジは遠い目をしながらそう呟くのだった。

「これを運ばいいんですね？」

「ああ、やはり男手があると違うな」

「ええ、力仕事なら任せてください」

放課後、生徒会室で段ボールを持つタカトシ。これまで女性しかいなかった生徒会に新たに加わった男手として初日からビシビシと働かされている。

「ほう、その力を試させて貰おう」

「はい？」

「今日は重い日なのだ」

「突っ込まなくていいよね？」

そう言いながらもお姫様抱っこでシノを抱き抱えるタカトシ。彼の女のボケに律儀に付き合っただけであげている。

二人の動きが止まったのはその数秒後、パシャッと響いたカメラの音に反応しての事だった。

「あ、お構いなく」

「……違うぞ畑」

「いや、会長も副会長もお手が早いですね。じゃ私はこれで。」

また面白い企画思いついたらご協力お願いしますね。いえ深い意味は無いです」

しっかりとタカトシがシノをお姫様抱っこしている所を写真に収められてしまった。ランコはいつものポーカーフェイスで生徒会室を出ていった。

「……あの、もしかして今弱みを握られたんじゃ」

「……あはははー」

「現実逃避しないでくださいよ」

シノをお姫様抱っこしたまま、その後生徒会室に帰って来たアリアとスズに発見されるまで二人はしばらく固まって現実から逃避した。

「今日は酷い目にあつたわ」

「城島と黒田から中村匂を感じるんだよなあ」

放課後、タカトシとシノの痴態がランコにスツパ抜かれていた頃、誰も居なくなつた教室ではアヤナとマサヒコが早速委員長と副委員長としての仕事をしていた。

「まあそれでも委員長になれたし、良しとするわ」

「そんなに委員長になりたかつたのか？」

「……ええ、なりたかつたわ。なんとしても」

少し意味深な雰囲気でそう答えるアヤナ。マサヒコもその雰囲気を感じ取って無言で資料に目をやる。

「……お父さんにアメリカに行かないかと言われて、凄く迷つたけど結局桜才に決めた」

「……どうして？」

アヤナは少し躊躇してから、夕焼けに染まる窓の外に目を逸らして見て答えた。

「……強引に私と一緒に寝たり、押し倒したりする不届き者に責任を取って貰わないといけないから」

夕日で赤くなつた教室でアヤナはマサヒコを見つめてそう言い放つた。

「……」

「でもね、その不届き者は高校で出来た友人いわくハーレムを狙っているらしいの。どう思うかしら小久保君」

「……いや、流石にハーレムとかは違ふと思うぞ？」

マサヒコは背中に汗をかきながら、同い年とは思えない妖艶な委員長を相手に応戦する。

「修羅場ど真ん中だね……ごめんねなんか悪い事しちゃったかな」
聞き耳を立てていたのは五人の少女達、中でも天野ミサキは低い
笑い声を出して拳を握っている。

「あ、ううん、いいの。もうお互い宣戦布告はすんでるから
」？」

ミサキの言葉にマナカとカナミは疑問符を浮かべる。

去年の事、小久保マサヒコと的山リンコの家庭教師であった濱中
アイと中村リョーコを招いての感謝パーティーでの出来事。

ミサキとアヤナはお互い同じ男性に惹かれている事を告げあった。

そして、高校で決着をつけようと約束しあったのだ。

「（負けないからね、若田部さん）」

「お腹減ったなーそろそろ帰ろうよー」

「うんそうだねリンちゃん。じゃあ私達は帰るね」

内心で決意を新たにしながらも、『マサちゃんもマサちゃんだよ
ね、お仕置きだよね』と笑みを浮かべる天野ミサキであった。

5話(前書き)

ゆったりまったりショートストーリー

5話

5話

「えー桜才学園放送部、 昼休み校内放送の時間です」

「新一年生の皆様こんにちは！ パーソナリティは二年生一のイケメン新井カズヤと！」

「……城島シンジですよろしく」

「あ、 お兄ちゃんだ！」

昼休み、 今日も昨日と同じメンツで昼食を食べている。 カナミはスピーカーから聞こえて来る兄の声に反応して声を上げた。

しかしマサヒコはそれ所では無く、 急に量が増えた弁当を前に冷や汗をかいていた。

「……流石に多すぎなんじゃ」

「まさか、 残さないよね小久保君？」

「この私がつって来たのよ？ 分かっているわね？」

「……はい」

そんなマサヒコの事などお構いなしに放送を続く。

「えー新一年生に分かるように解説させて頂きます！ 昨年からはまったこの校内放送、『女子ばかりの学校なんだから男子にパーソナリティやらせろ』と、 ある教師が言った事を発端に暇人だった我々が昼休み限定で放送部に特別招集されて送る放送です！」

「たまに生徒会長や新聞部をゲストによんでお悩み相談や学内のニュースを伝えています。 まあ昼休みの暇潰しにでもお聞きください……まさか今年もやらされるとはなあ……」

カズヤはノリノリであるがシンジは気怠そうにしている。

「いいじゃねえかよ。 お前はこれでモテてるじゃねえか」

「んな事ねえよ、 ほら早くお悩み相談のゲスト入れるぞ、 生徒会長の天草シノさんです」

「どうも、生徒会長の天草です」

シノがいつものように凜とした声で放送にと参加する。

「じゃあ早速お悩み相談、初っ端は新一年生の子だぜ。ラジオネーム『ジョージ・マッケンジー』さんのお悩み。『私には兄が居ます、兄と私は相思相愛。お風呂もベッドの中でも一緒なんです。でもやっぱり血の繋がった兄妹、この関係はいけないでしょうか?』」

「お昼の校内放送に送る内容じゃねえよ!」

シンジが声を荒げる。

「しかし、切実な悩みではないか。禁断の愛と言うやつだな。

しかしジョージ・マッケンジーさん。桜才は一応恋愛禁止だ。程々にな」

「そこじゃねえよ! 駄目に決まってるだろ!」

「ま、会長の言う通り程々につて事だな、あ、あとジョージ・マッケンジーさん。お兄ちゃん君がエロ本盗むの本気で困ってるからそれも程々にしてやってくれよ?」

「カズヤ、まじでぶん殴るぞ?」

どうにもカズヤにはジョージ・マッケンジーさんの正体がバレバレだったようで意味深なメッセージを送る。

「ジョージ・マッケンジーさんの恋、実るといいですねカナミちゃん」

「うん、そうだね。でもエロ本くらいいいじゃんねえ?」

「……さっきのお悩み相談って」

「(スルーしよう)」

ミサキとアヤナがカナミを見つめる中マサヒコはスルーを決め込んだ。

「えー続いてのお悩み相談、ラジオネーム『ジャツジメント』さんから。『生徒会長と副生徒会長は出来ている!? 衝撃のスクープは次号校内新聞で!』」

「ただの告知じゃねえか!」

「……生徒会権限で発刊禁止処分とする。次だ」

二年生教室で「横暴よー！」と叫ぶ少女の姿があったが、何事も無く放送は進んで行く。

「続いて、ラジオネーム『名キャッチャー』さんから。『私にはぶっ飛んだ友達が居ます。そのぶっ飛んだ友達にはお兄さんが居るのですが、共にそのぶっ飛んだ友人に振り回されている内に少しずつそのお兄さんとの距離が縮まり、今は少し好きになってしまっている気がします。友達のお兄さんを好きになるなんて駄目でしょうか？』」

「やっぱり、去年同様恋愛相談が多いな。会長が来てる時ならいいけど、俺達だけの時はどうしようもないんだけどな……」

「うむ……だが本人には重大な悩みだ。やはり友人の兄という事で遠慮もあるのだろうが、ここは積極的に行って妹と竿姉妹となるのはどうだろうか？」

「アンタ解任されるぞ！」

会長の衝撃発言でアキはブボツと飲んでいた牛乳を飛ばす。

「わあ！ どうしたのアキちゃん!？」

「大丈夫ですか、それはそうと本当に現役時代はいいキャッチャーでしたよね」

「……なんの事よ」

アキは誤魔化すように目を逸らして牛乳を雑巾で拭き始めた。

「では続いて、『元カープ』さんから。『処女を捧げると決めた相手が中々私のアプローチに乗ってくれません。何かいい方法はないでしょうか？』」

「知らねえよ！ って言うか相談内容去年より酷いぞ！」

「うむ……やはり強攻策だろうな『私の処女マ』コぶち抜いてください』と……なんだ津田どうし」

そこで強引に放送は打ち切られた。予想以上の放送内容に皆は面白がって続きを流せと騒いでいる。

「いや、酷い放送だったな」

「でも、生徒の悩みにちゃんと答えてくれる生徒会長いい人だよ。若田部さんと天野さんも送ってみたら？」

「……遠慮するわ！」

「……流石に恥ずかし過ぎるかな」

アヤナとミサキは顔を伏せて少し考えたが恥ずかしそうに顔を上げてそう答えた。マサヒコはようやく二人分の弁当を平らげた所だった。

「やはり淫語ですか……早速最適な物をリストアップします」

「隠す気無しかよ元カーブ！」

「一緒に頑張りましょうねアキさん」

「……何の事よ！」

マナカとアキもそれぞれの反応を見せ、この日の校内放送は大盛況で幕を閉じたのであった。

「はあ……散々でしたよ」

「うふふ、シノちゃん少し張り切り過ぎちゃったみたいね」

あの後、コツテリしぼられてしまった生徒会役員共とパーソナリティ達、放課後再度呼び出され厳重注意をくらってしまった。

アリアとタカトシは資料を運んで生徒会室を目指していた。

「張り切りすぎですよ……どうしたんですか？」

「ねえ、津田君」

ジツーと上目づかいでタカトシを見つめるアリア。正直かなりの美少女なのでときめくタカトシだった。

「なんででしょうか？」

「津田君ってマゾ？ サド？」

「いきなり何言ってるんですか！」

「気になってさ。相性って大事でしょ？」

「何の相性ですか何の！」

「うふふ、何の相性がなく？ さあシノちゃんもスズちゃんも待ってるし急ごっか！」

「……はい」

かなり奔放な先輩七条アリアに振り回されながらも満更では無い自分
に気がつき、もしかしたらマゾなのではと心配になる津田タカ
トシなのであった。

6話(前書き)

ゆったりまったりショートストーリー

6話

6話

朝、小久保マサヒコが寝ぼけまなこで学校に向かう通学路を歩いている。ふと前を見ると数少ない男のクラスメイトである津田タカトシが同じく寝むそうに歩いている。

「おはようタカトシ、生徒会も大変そうだな」

「マサヒコか、おはよう……本当に大変だよ」

ここ数日で、境遇が似ているからか何か惹かれる物があり二人は既に名前呼び合う程に友情を育んでいた。

「今日も朝から校門前で呼び掛けだったんじゃないのか？」

「ああ……でも寝坊した。萩村に恐る恐るメールしたら次から迎えに行くからって怒られた」

「はは……でもいいじゃん。あんな可愛い生徒会役員に囲まれて、羨ましいよ」

「どの口が言ってるんだよ……もう有名だぞ、新一年がハーレム作ってるって」

「……そんなんじゃないっての」

「こら津田ああ！」

校門近くまで行くと可愛いらしい声でタカトシを呼ぶ声が聞こえてくる。凄いい形相でスズがこちらを見ていた。

「ほら、呼んでるぞ」

「じゃあまた教室で」

一回りも小さい少女に謝っているタカトシを見送ってマサヒコは教室に向かう。

下駄箱を出た所で、一人の少女が呆然と立ち尽くしているのに気がつく。

「……どうかしたの？」

「……職員室、分からなくて」

恐る恐ると声を掛けると眼鏡の少女はそう小さな声で呟いた。どこか脱力したような雰囲気であるが驚く程に可愛いらしい。

「ん？ 職員室？ それなら普通に……まあ一応案内するよ」

「……ありがとう」

少女は感情が読み取れないような表情でタカトシの後に続いて歩く。

「変な事を聞くようだけど。私の事知らない？」

「え？ いやごめん。どこかで会ったっけ？」

「いえ……ごめんなさい。もっと頑張らないといけないのね」

「話がちよつと分からないんだけど……」

突然変な事を言っている少女、マサヒコは過去に会ったことがあるのかと記憶を総動員して思い出そうとする。

「私、一応アイドルやってるの。トリプルブッキングって知らない？」

「ああ……名前だけなら。ってまじで!？」

先程から通り過ぎる生徒から視線を感じていたマサヒコだったが、まさかそれがこの少女に向けられているとは思ってもしなかった。

「お仕事で入学式とか出れなくて……今年新入生なの」

「お、 同い年か……びつくりしたよ。確かトリプルブッキングって三人組で……背のデカイ子と中くらいの子と小さい子……だったか？」

「そのデカイ子。 如月カルナです。 応援してね」

「如月カルナさんか。 よろしく。 俺は小久保マサヒコ。 同じ

く桜才の一年生」

二人で自己紹介を終えた所、パシャパシャ、とシャッターを切る音が響く。

「どうも、 桜才学園新聞部畑ランコです。 早速インタビューを

新一年に現れた二人のハーレム王、 その一人小久保マサヒコ君が新たにハーレム入りを狙っているのがまさかアイドルとは……生徒会を掌握しようとする津田タカトシ君への対抗ですか？」

「脚色が酷すぎる!」

「貴方……ハーレム王だったの？」

「普通に考えてそんな訳ないだろ！」

「こちらはアイドルの如月カルナさん。　どうして芸能系の高校で無く桜才を？」

「昔から憧れでしたし……家に近いから」

いきなり現れたランコに驚きながらもインタビューを受け続けるカルナ。

「何かテレビで見るより無愛想な気もするんですが」

「あれはアイドルスマイルです」

「君も淡々と答えなくていいから！　ほら畑さん、　あまり言つようならタカトシに言い付けてまた発刊禁止にしますよ？」

「……マスコミを抑圧するとあとで痛い目にあうわよ」
そう言い残してランコは去って行った。

「ありがとう、　ハーレム王さん。　助かったわ」

「だから違つって！　あれはあの人が勝手に言ってるだけで……」
「そうなの……あ、　ここね」

そうこう言っている内に職員室の前にとやって来ており、　カルナはその前に立って小さくまた呟いた。

「道案内ありがとう」

「ああ、　それじゃあまた合う事があつたらよろしく」

「……うん」
そう言い残したマサヒコは教室にと向かって歩いて行った。

「……」

カルナはその背中を無言で見送った。

「どうですかカルナさん、　中々いい男でしょう？」

「貴方はパラッチさん、　まだ居たんですか？」

「パラッチとは失礼な、　彼は二人のハーレム王の一人と言われるだけあつて性格、　容姿、　運動神経抜群、　勉強は普通だけでも人気は高い物件よ？」

「……貴方もお気に入り？」

「私は会長のお気に入りの子の方が……私はいいんです。 どうですか。 是非アイドルの恋愛スクープって言う特ダネ我が新聞でやらせてください」

又ツといきなり再登場したランコに驚きもせずカルナは淡々と答える。 ランコの方がつい口を滑らせる始末だった

「どうぞご勝手に」

「それは、少しは脈アリと解釈していいんですね？」

「……さあ？」

そう言つて、 特上のアイドルスマイルをランコにかましてカルナは職員室にと入って行った。

「……それを彼にやってればもっと面白い事になったかもしれないのに。 さあ忙しくなるわ」

ランコはそう言つて早速新聞部の部室にと向かうのであった。

7話(前書き)

ゆったりまったりショートストーリー

7話

7話

入学式から二週間程が過ぎた。ようやく学校生活に慣れて来た頃と言えるがマサヒコは早速の窮地に陥っていた。

「おはよう、見たよマサヒコ。凄いなあ」

「……なあ、生徒会である学校新聞廃刊にしてくれよ」

「はは……畑さんは言っても聞かなそうだしなあ」

マサヒコが机にうなだれている理由。それは今日の朝学校に来ると廊下の至る所に校内新聞の新刊が貼られていたから。

その煽り文句は『現役アイドルに恋人発覚！お相手はやはりハーレム王の一人一年KKK君！?』
となっていた。

「ま、まあ一応イニシャルだし」

「タカトシだって明日は我が身だぜ？」

「……皆は？」

タカトシがクラスを見渡す。チラチラと皆がタカトシとマサヒコ達を見ていたようだが、マサヒコがここまで恐れる『本命』はまだ来ていないようだ。

「若田部は委員長だからって学校来てすぐ呼ばれたらしいミサキは家の用事があるからってまだ……」

「おはよー」

二つの弁当箱を持ったミサキが教室にと入って来る。教室の皆は息を呑んで様子を伺う。

「おはよう天野さん……じゃ、じゃあ俺はここらで」

「お、おい！見捨てないで」

「おはよう。マサちゃん」

「お、おはようございます」

『（目が一ミリも笑ってねー！）』
クラスの人間はまだミサキのこの部分を知らないのであまりの怖さに驚愕する。

「ねえマサちゃん。すごいねアイドルと付き合ってる人が居るんだって」

「いや……付き合つとかじゃないと思うぞ？」

「そうなんだ、隣のクラスの如月カルナさんだっけ。凄い可愛いよね。流石アイドルだよな」

「……そ、そうだな」

「マサちゃん……いい加減にしようね？」

「違う！ 違うんだってミサキ！ あれはたまたま迷ってたからー」

「面白そうな話をしているわね。私も仲間に入れてくれるかしら？」

最高過ぎるタイミングで帰って来たアヤナもマサヒコの隣に座り、マサヒコにとって阿鼻叫喚の地獄が始まるのであった。

「お兄ちゃん、ハンカチティッシュ持った？ ティッシュは一杯持たないと駄目だよ！？」

「学校ではそんなにティッシュの消費量多くないから！」

下駄箱に大きな声が響く、城島兄妹は今日も仲良く登校して来たようだ。

「まさか学校に処理してくれる人が！？」

「いねえよー！」

「お兄さん」

下駄箱に靴を投げ入れてシンジが叫ぶ、その後ろにはいつの間にか黒田マナカの姿が。

スツと手を差し出してシンジに何かを渡す。

「処理に困ったらこれを」

「これは……鍵？」

「貞操帯の鍵です」

「このポケドキツとするね」

赤面して貞操帯の鍵を渡すマナカの姿をアリアとシノが物陰から覗く。

「やはり城島は年下好きだったか……乱れているな」

「あんなやり方もあるのねえ。津田くん誕生日いつかなあ」

「その二人、変な勘違いしてないで出てこい」

今日も平常運行の桜才学園なのであった。

8話(前書き)

まったりゆったりショートストーリー

8話

8話

高校に入学して二年目の春、女子ばかりの桜才学園に入った城島シンジが唯一ゆっくりと休む事の出来る休日。昼までぐっすり寝ようと決め込んでいたがどうにも息苦しさを覚えて目を覚ます。

「お兄ちゃん、起きた？ おはよう」

シンジの妹、城島カナミ。一つ下の妹で普段家を空けがちな両親に変わりよく面倒を見てくれる、料理も上手く可愛い妹なのだが、一つだけ大きな問題があった。

「……なんでお前俺の顔面に乗ってんの？」

「顔面騎乗」

「顔面騎乗で兄起こす妹が何処に居るんだよ！」

城島カナミ十五歳、妹は思春期だった。

「朝一番で何やってんだこの兄妹は……」

「カナミちゃん、起きないようなら私が変わりましょうか？」

「起きた起きた！」

カナミに便乗してマナカまでシンジの上に乗ろうとし始めたので流石に飛び起きるシンジ。

「起きた起きたって、下半身まで起こして言わなくていいよお兄ちゃん」

「朝勃ちだから仕方ねえだろ！ マナカちゃんアキちゃんいらっしやい」

「あ、お邪魔します」

「今のいらっしやいは『俺の朝勃ちしたモノを啜えにいらっしやい』と解釈していいんですか？」

「超解釈もいい加減にしろよ！ カナミ俺の飯ある？」

「うん、下に用意してあるよ」

シンジは欠伸をしながらリビングにと降りて行った、カナミは部屋に入ったついでにと掃除を始めている。

「あんた達、いつつもこんな感じなの？」

「まさかあ、いつもは優しくキスして起こしてるよあ」

「……………」

「冗談だよ冗談、アキちゃんとマナカちゃんはお兄ちゃんのエロ本でも読んで待ってて？ アナル特集と盗撮物あるけどどっちがいい？」

絶句するアキにカナミはケラケラと笑ってエロ本を差し出す、マナカはすぐにエロ本を受け取り早速癖のついたページを発見し開く。「私は盗撮物で、うわ、お兄さんエグイアングルで……………」

「じゃあ私はアナル特集で……………ってなる訳ないだろ！ 私も掃除手伝うから早く終わらせようぜ」

男の部屋に入る機会なんて無いアキは内心ドキドキして部屋を片付け始めるのだが大量のエロ本にげんなりとしてしまう。

「……………なんかこの兄あつての妹って感じ」

「でもいいじゃん、このラインナップ見れば分かるようにお兄ちゃん結構な巨乳好きだから、アキちゃん可能性バリバリあるよ、

私なんてこれだから……………」

「……………別に私は可能性なんて無くていいの、それよりあんたに可能性あつたら色々マズイでしょって」

「あはは、もー何言ってるのアキちゃん」

「ははは、そりゃ冗談だよなー」

「実の兄妹だから興奮するんだよー」

「……………え？」

「うーんやっぱり結果お兄さんはアナルフェチ、そこに着地しそうですね」

「ねえ君達なんで俺のエロ本漁ってるの？」

休日でも平常通りの城島家であった。

「…………痛て、おいコトミ…………そっか今日明け方まで一緒にゲームしてそのまま寝たんだっけか」

寝返りを打ったコトミの裏拳をくらってタカトシは目を覚ます。クラスではカナミに対して「兄妹でそんな事をするのはおかしい」などとツッコんでいるタカトシなので、この状態を見られたら何を言われるか分かったもんじゃらないと苦笑するタカトシ。

「本気で、コトミと城島を会わせたら駄目だと思う…………ほらコトミもっっそっち行け」

「うわータカ兄に寝起き襲われるー」

「元はと言えばお前が入って来たんだろ！」

半分寝ぼけてとんでもない事を言うコトミを抱き上げてベッドの端っこに寄せて、タカトシは二度寝の体制に入るのだった。しかしすぐにコトミが寄り添って来て結局元の形に戻るのだが。

たっぷりと昼過ぎまで寝て。結局今日も夜更かしして翌日迎えに来たスズに兄妹で起こして貰う津田兄妹なのであった。

「…………あら」

「あれ、若田部さん。どうしたの？」

「ふふ、「委員長」として「副委員長」と今後の相談をね」

「そ、そう！私も「幼馴染」としてマサちゃんの様子を見に行く所なの」

朝早くから火花を散らす二人、マサヒコの家の前で数秒睨み合って家の中に入りマサヒコの部屋に向かう。

そこには気持ちよさそうに寝るマサヒコとリンコの姿が。

「…………」
「…………」

それを見て絶句してしまう二人。数秒のフリーズが溶けた後、何か禍々しいオーラが二人から放たれる。

「……ふふふ、 そう、 私だけじゃなく的山さんとも……いい度胸してるわね」

「……マサちゃん、 いい加減にしようか？」

拳を振り上げる二人だったが、 マサヒコとリンコの寝顔を見て少しボルテージが下がる。

「……なんと言うか、 最強よね的山さん」

「そうだね……勝てないよ」

「特別に……見逃してあげようかしら」

「そうだね、 起きてから問い詰めればいいよね」

いい感じにまとまり掛けていたが、 マサヒコが寝ぼけてリンコを抱き寄せ寝返りを打つ。

リンコも気持ちよさそうに声を喉を鳴らすの見て、 二人は渾身の右を打ち下ろすのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7505x/>

『生徒会役員共も妹も女子大生家庭教師（の生徒達）も思春期』

2011年11月26日01時53分発行